



Be creative !

ダンス部快挙！「JHC ダンスコンテスト」全国大会出場決定



Big News です。ダンス部の努力が大きな花を咲かせる瞬間が来ました。今年は中学生の皆さんを迎える公開見学会においても「本校の顔」として活躍の幅を大きく広げてきたダンス部が、この12月、横浜ランドマークタワーで開催される全国大会に出場することになりました。中心になって活動してきた3年生伊奈穂乃佳さん、2年生塩谷揚羽さんに、ダンス部を代表してインタビューに答えてもらいました。

★全国大会出場を聞いた時の気持ちは

最初にこのことを確認したのは伊奈さんでした。びっくりして、思わずお母さんを選んでしまったとのこと。塩谷さんも伊奈さんから連絡を受けて「本当にびっくりした！」と言います。練習を積み重ねて「このメンバーならやれる！」と確信を持っていた彼女です

が、やはり全国大会は遠い存在。「これまで個人で上位の大会に出場したことはあったが、学校という単位で出場できることがびっくりだった。本校のダンス部でも初めてのことなので、心からうれしいと思う。」率直な喜びが語られました。

★作品のコンセプトの共有に向けて

「イメージは“女帝”」と振付をした塩谷さん。話を深めていくと、それは「女性が本来持っている人間としての凛とした強さ、美しさ」、女性が内面に秘めている魅力を表現した作品であることがわかりました。「みんな、やっぱり高校生で、おさなくてかわいい。最初は自分がイメージした“強さ”が出せるんだろうかと不安だったけど、練習や話し合いを繰り返す中で、どんどんみんな、格好いい雰囲気が出せるようになっていった。スキルも上がっていった。」と塩谷さんは手ごたえを感じます。だからこそ、一人一人の持ち味を生かしたいという思いも強くなっていきます。振付のベースは塩谷さんが考えたものの、練習の中で短いフレーズをそれぞれが考え、よりいいものをチョイスしていったとのこと。上記写真の衣装とメイクは杉田梨桜さんが担当。「彼女のセンスは抜群！」と二人は彼女を推します。聞けば、演技の時間は2分ちょっとのこと！「今回、ノンストップのダンスがしたかった。」その振付を考えると眠れない夜もあった。「でもこの12人の魅力を最大限に生かしたい。」大会の規定の舞台にぎりぎり乗る人数がこの12人だった。だからこそ、それをいかしたフォーメーションを考えたと塩谷さんは語ります。「ダンスは最初の15秒が勝負。ここで観客を引き付けられるかどうかは鍵。」まさに秒単位で振り付けを考え、工夫と努力を重ねた様子が二人の話から伺えました。ダンスでは表情も重要！「イメージを互いの中に作りあげるために練習の最後にはビデオを撮り、帰宅後、それを観て自分も表情作りの工夫をした。」と伊奈さん。意見の違いに悩んだ時もあったが、なんでも言い合える関係づくりをしてきた、だから互いが率直に意見を述べ、よりよい作品作りを追求することができた。このことに二人が大きな自信と確信を持っている様子がインタビューから強く伝わってきました。二人の話には「成長していく部活の秘訣」がいっぱい詰まっていた。

★部長を務める中で学んだこと

今年度の文化祭まで部長を務めてきた伊奈さん。「自分から部長をやりますと言えたことは本当に良かった。」と語る。とはいえ、個性派ぞろいの部活のメンバーをまとめることは難しく、伊奈さんはたくさん悩みます。「でも、悩んだ分だけ、自分にも部活にもその成果は返ってきた、仲間たちとも分かり合えるようになってきた、1年生で「ベストビジュアル賞」を獲ってしまうような頼もしい後輩たちもやってきた、すでに卒業してしまった先輩たちも本当に仲が良かったし、面倒見もよかったことを思うと自分は恵まれた環境にいたんだ」と伊奈さんは語ります。「話し合いはやっぱり難しい。単純に多数決では決められないことが多い。少数派の子の意見も大事にしたかった。まとめようとして、一日たってしまうこともあった。嫌われることもあったけど、嫌われ者も必要と自分を納得させた。」部長としての覚悟を彼女は語ってくれました。

★自分にとって“ダンス”って何？

「生活の一部、宝物、自分が輝ける場所」と塩谷さん。小さい時からダンスに取り組んできた彼女にとっては生きてきたことそのものという感じもします。「仲間や家族、支えてくれる人の大切さに気づかせてくれるものであり、達成感が味



わえる競技。今回もたった2分間の演技ではあるが、自分のすべてをそこにぶつけ、それが評価されたことが何よりうれしい。この感動をもっと味わいたいという思いを強く感じている。」と彼女は語ります。「踊っている自分が好きになった」と語るのは伊奈さんです。「あまり褒められたことはないが、それだけにたまにダンスの先生が褒めてくださると本当にうれしい。踊ることはやっぱり楽しいって思う。」その思いは皆さんのダンスから十分に伝わってきますよ。

最後に全国大会にかける思いを聞きました。「演技は2分間という時間だが、この時間は私たちにとっては本当に長い時をかけて創り上げてきたもの。実際、この夏からずっと追いかけてきた思いがこの作品には詰まっている。これまでがんばってきたことのすべてをかけて大会に臨みたい。強豪もそろっているのに、優勝は難しくても、何らかの賞は手にしたいと強く思っている。」と二人は強く語ります。全国大会への進出は確かに快挙です。しかしながら、大会にチャレンジをし、積極的に評価を求めて外に飛び出していく、チアダンスに取り組み、他者を応援する存在となっていく、そんな彼女たちの活躍をふり返れば、全国大会出場は納得の成果でもあります。頑張れ！今度は全校がダンス部を応援します。

第70回私学弁論大会

今年の私学弁論大会が11月16日、岡崎にて開催されました。本校からは2年生の福島そなさんが代表として出場しました。福島さんはこの9月、所属している和太鼓部のフィールドワークで東北を訪問します。これまで和太鼓部が粘り強く続けてきた震災支援活動が3年ぶりに再開されたのです。そのフィールドワークの中での学びをまとめ、大会に出場しました。これまで和太鼓部の先輩たちが培ってきたものに新たな視点が付け加えられており、読み応えのある作品となっています。私たちも彼女の弁論を通して学んでいきましょう。

「ふるさと」 本校代表生徒 2年 福島そな

「大きな地震が発生しています。身の安全を確保してください…」

鳴り響くサイレンの音、2011年3月11日の映像。画面の中で、町は津波のみ込まれていきました。画面が切り替わると、原子力発電所からは煙が立ち昇っています。

今年、私は震災から11年が経った被災地を訪れました。私の所属する和太鼓部は、東日本大震災の被災地、宮城県石巻市と福島県川俣町山木屋地区への訪問活動を続けています。事前学習として見た映像に映っていたのは、それまでの人々の暮らしが奪われた瞬間でした。「ふるさと」とは、生まれ育ったところ。これまで和太鼓部が出会ってきたのは、震災によって様々な形で「ふるさと」を失った人々です。

東日本大震災が起こったその年の夏、和太鼓部は初めて現地を訪れました。演奏したのは、生々しく残るがれきの中でした。「忘れないでいてくれてありがとう」これは、震災から3年目の夏にいただいた言葉です。山木屋の方が避難生活を送る仮設住宅におじゃましたこともあり、「帰りたい。放射能で死んでもいいと思っています。」と話してくださったのはその家のおじいさんでした。出会いや言葉だけでなく、被災地を訪問する意味を、和太鼓部は先輩から後輩へ受け継いでいます。先輩たちは、「現地に行かなければ知り得なかったことがたくさんある」といいます。そして、「震災を他人事ではなく我が事と感じて繋がり続けることが、何よりの励ましになる」と教えてくれました。

石巻に到着して、私が目の当たりにしたのは、逆流したままの川と流された松林の跡でした。震災遺構として残されている小学校の崩れた校舎も見学しました。新しくきれいな建物ばかりが並ぶ中で、それらは、震災が確かにあったことを伝えていました。同時に私が感じたのは、ここは震災を境に変わってしまった町なのだ、ということでした。もうひとつの訪問地、福島県川俣町は、原発事故で全ての住民が避難した町です。避難指示が解除された今も、夜の町は少し先も見えないほど真っ暗でした。避難生活が長く続いたせいで、戻らないことを選んだ方も多く、家の明かりがほとんどなかったのです。私の目の前には、地震と津波で町が一変し、家族を亡くし、避難生活を余儀なくされながら生きてきた人々の11年がありました。演奏の準備をしていたとき声を掛けてくださったのは、がれきの中での演奏で出会った阿部邦子さんでした。震災直後から避難所のリーダー的役割を果たしていた邦子さんは、訪問の度に和太鼓部に震災のお話を聴かせてくださいます。今年も、私たちを迎えてくださったのです。それだけではありません。建物には、私たちの演奏を知らせるチラシが貼られ、たくさんの人が私たちの演奏を楽しみに集まっていた。

「ふるさと」とは、自分を待っている人がいるところ。迎えてくださる温かさに、私はふと帰ってきたような感覚になり、ここは私たち自身の「ふるさと」になりつつあるのだと感じました。笑顔を交わらせることが、ただただうれしくて、私は来てよかったと思いました。和太鼓部が被災地を訪れる意味は、もう、励ますことではないのかもしれない。この思いは少しずつ大きくなりました。山木屋では野菜の収穫を体験しました。畑を運営する宮地さんは、もとは愛知



県の方です。震災後に派遣職員として応援に参加した後、川俣町の職員となって山木屋に移住しました。宮地さんは言います。「田舎である被災地の復興とはどのようなものか。大都会のようになることが復興なのか。経済が活発になることが復興なのか」。宮地さんは「新しい価値を生み出せるようになることが復興だ」とおっしゃいました。宮地さんの育てている野菜も、新しい価値のひとつです。生のままかじったピーマンが、驚くほどおいしかったのを覚えています。山木屋では、帰ってきた住民と、新たにやって来た人とで、文字通り「新しい町づくり」が始まっていました。そこに、私たち和太鼓部の果たせる役割もあるのではないかと思います。

震災で「ふるさと」を失った人々は、それでも今、それぞれの地で前を向いて生きています。震災を機に町は変わりました。でも震災を機に私たちは、石巻と、山木屋と、繋がりました。「ふるさと」とは、これから再び人の営みが根付くことで、未来に向かって新たな「ふるさと」になっていくところでもある。そう考えることができるならば、私は、これからも繋がり続けることで「ふるさと」をつくる一員になりたい。

愛知へ帰る日の朝、私たちを囲むように並んだ方々は、うなずきながら和太鼓の音に耳を傾けてくださいました。たくさんの方と目が合い、またここへ帰ってきたいと強く思いました。震災から11年を経て、今、和太鼓部が被災地を訪れる意味は、新たな「ふるさと」づくりの担い手として、訪れることそのものにあるのだと私は考えています。ご清聴、ありがとうございました。

2022年度私学協会表彰 受賞 おめでとうございます！



今年度の私学協会の表彰において、本校和太鼓部と3年生清田海斗さんが表彰されました。和太鼓部は文化活動において優秀な成績を残したこと、清田さんは学習と部活の両面において努力を積み重ねたことが評価されての受賞です。生徒たちの奮闘は、私たち教員にとって最大の喜びです。おめでとう！よく頑張りました。



【久々に「今月の言葉」です】

グローバル時代を生き抜く力を！

成蹊学園 学園長 江川雅子氏

「グローバル時代をどう生き抜くか。ポイントは多様な文化的背景の人たちと一緒に仕事をする事です。それができれば居場所を限定せず、世界中のどこでも生きていくことができます。そのためには論理的思考力、異文化力、自分で考える力、コミュニケーション能力、教養、ストリートスマートの6つが重要だと考えています。」と江川氏は語ります。この6つの力を江川氏がどう説明しているのか、紙面の都合で、すべては取り上げられませんのでその一部をここでは取り上げます。

コミュニケーション能力 世界では英語を使う人が増えましたが、ほとんどの人が外国語として学んでいます。ですから、世界の共通語は「ブロークン・イングリッシュ」。発音、文法がおかしくてもどんどんしゃべって上達をしよう。大事なのは「伝えようとする姿勢」表情・身振り・手振りもそこに付け加えて！

教養 学び方を学んで、生涯学び続ける基礎を築くために必要不可欠なもの。

ストリートスマート この言葉の対義語は「ブックスマート」つまり本や学校から学べるもの、この「ストリートスマート」とは社会でいろんな人と接して培われる対人能力、判断力、柔軟性です。

江川氏は最後にこう言われます。「試行錯誤することを恐れず、若い時にぜひ海外経験をしてください。思い切って海外に飛び出し、自分を大きく成長させていってください。」

11月17日 朝日新聞より